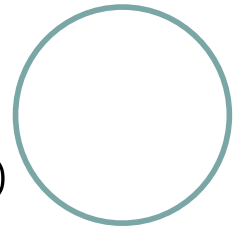


北海道の労働と福祉を考える会 会報

# ともに生きる

## 2009年度 冬(?)号 (第19号)



### さいきんの夜回りのこと

事務局次長 澁谷洋平(北星学園大学社会福祉学部 3年生)

夜回りの活動報告とその課題について、個人的な感想を含めて述べていきたいと思います。

夜回りは継続的に行うことが大切な活動です。継続的に夜回りを行うことによって、野宿者の方々と仲良くなることができ、信頼関係を築きかけにもなります。そのため、継続的に参加しているスタッフは、毎回同じところを回るようにしています。また、当会との付き合いが長い野宿者の方もいて、夜回りの時間に合わせて顔を見せに来てくれる方もいます。

しかし、今の夜回りは、顔なじみの方々に会いに行くことが中心となっています。回る場所が決まっているため、野宿者の方々が増えていると言われる中で、夜回りで会う野宿者の数が増えていない状況です。違うルートを回るなどして、回り方などを見直す必要があります。

次に、声のかけ方が課題として上がっています。札幌の野宿者は、見た目では見分けにくい部分があるので、野宿者ではなかったときの対応が難しいため、声をかけるかどうか迷うことがあります。そのため、野宿者に声をかけずに通り過ぎてしまうことが起きているかもしれません。そのため、どのように声のかけをしていくのか考えなければなりません。また、顔見知りの野宿者の声のかけ方についても、考えていかなければなりません。毎回、世間話などで終わってしまうことが多く、就労や生活保護などのコアな部分を聞き出せていない状況にあります。

他には、物資の問題もあります。毎回の夜回りにはパンとコーヒーを持っていきます。しかし、ごく一部ですが、パンを受け取っても捨ててしまう人もいます。そのため、当会では物資を渡すべき

か否かと検討中です。中には本当に物資を必要としている人もいますので、当会の自立支援という方針から、物資に限らず、野宿者のニーズに合うような援助を考えていかなければいけません。

継続的にいき、参加者の増えてきている夜回りですが、このように課題もあります。それらの課題を見直し、定例化している夜回りを改善していかなければいけません。

ここからは個人的な感想ですが、最近何のために夜回りをするのかを考えます。色々な意見がありますが、個人的に一番大切なのは野宿者にとって「ホーム」を作ること必要であると考えています。「ホーム」とは、自分が安心していられるような場所(自分のことを必要とってくれる人がいて、帰ることができる故郷のような場所)です。しかし、野宿者にはホームがない場合ほとんどであるので、少しでも労福会が野宿者のホームになることができればと思います。話を聞くなどして、野宿者が楽しくいられる場となれば良いと考えています。そうすることによって信頼関係が生まれ、就労や生活保護などのコアな部分の話を聞くことができ、自立支援にも繋がっていくと思います。個人的な考えですが、このようなことを前提において夜回りを行っていきたいです。



## 労福会10周年記念シンポジウム報告 北九州ホームレス支援機構代表の奥田さんのお話について

庄井 友輝(北海道大学 文学部2年生)

労福会も2009年で、結成10周年を迎えました！11月には、これを記念すべく、労福会主催で北大にてシンポジウムを行いました。シンポジウム全体の記録は、10周年記念冊子に収録する予定ですが、その様子を少し報告。

労福会設立10周年のシンポジウムでは、北九州のホームレス支援活動の第一線で活躍されている奥田知志さんに講演していただきました。ときにユーモアも交えつつ、実践を踏まえて語っていただいたお話は、私たちの支援活動を考える上でも示唆に富んでいました。今回は、そこでの記念講演と質疑応答について、以下にまとめさせていただきます。

北九州ホームレス支援機構代表の奥田知志さんの記念講演は、ここ15～20年で社会を大きく歪めた「自己責任論」への批判で始まりました。「自己責任論」とは、何か問題があっても、全て個人の責任であり、その人が解決しなくてはならないという考え方です。人類の長い歴史の中で作られた「他人」の関われる社会のシステムを、「自己責任論」は根底から否定してしまう。もちろん社会が責任を果たした上で、自分の人生に責任を負うのは人の尊厳ですが、「自己責任論」は社会や国家が無責任であることの言い訳になってしまうと奥田さんは指摘します。

奥田さんによると、ホームレス支援とは、社会そのものを再構成していく作業でもあるといいます。ホームレスが、野宿状態から居宅生活に移り、仕事を見つけて自立することを指して、「社会復帰」ということがあります。しかし、ホームレスを生み出した復帰先の「社会」そのものを問わずして、個人の問題であるかのように考える風潮があります。特に1985～2003年の派遣業の自由化に代表される経済の大幅な規制緩和が日本社会をおかしくしたと奥田さんは考えます。

私の中で特に印象に残ったのは、有効求人倍率を、「イス取りゲーム」にたとえた話。「足りないのは努力ではなくイス」。そこでイスを譲り合ったり、イスの形を変えたりすれば多くの人が座れるように、助け合い、必要なら社会の仕組みも変えていくというのが、実感を伴って理解できました。

奥田さんは、生活保護と住居を確保しただけでは、「ハウスレス」状態を抜け出せても、「ホームレス」状態は抜け出せないといいます。家庭・家族のような「ホーム」の絆

がないことがむしろ問題で、奥田さんの北九州ホームレス支援機構は、「ホーム」の設定に力を注いだからこそ、自立率が高いそうです。ホームレス支援のカギは「何に困っているか」を正確にグリップすることで、聞き取りをひたすら行うのはそのためだといいます。

「ホームレス」化は、地域の中でも起こっている、と奥田さんは指摘します。借金の時効に気づかず10年も借金取りから逃げ続けた人がいたように、地域の中での「無知と無縁」、それを支える「自己責任論」が地域・社会を「ホームレス」化させています。社会的枠組みの中で、どう「ホーム」を作っていくかが問われています。日本の福祉は基本的に「申請主義」なので、その後のケア・「伴走的コーディネート」が重要だという言葉に、地域全体でのアフターケアの重要性を改めて考えさせられました。

人は本当に困っている時ほど、「助けて」と言えないそうです。しかし「助けてと言えた日が、助かった日だった」というホームレスの方がいたように、社会が彼らを一度受け止めて、皆でリスクを負担し合う仕組みが必要だ、という言葉で講演は締め括られました。

その後の質疑応答では、労福会と連携する各団体の代表の方からの挨拶や、会への要望が寄せられました。要望をまとめると、「学生だけでは限界があるので上手に主婦・社会人と連携していくこと」「緊急対応が必要ならば、病院やベトサダ、なんもサポートなどへ即連絡」「経験・知識・ケースの伝達・事後学習の徹底」が求められました。

これらの議論を踏まえて、最後に



北大にて講演する奥田氏

奥田さんから「当事者のカルテのようなものを支援団体間で共有する仕組みがあってもいいのでは」と提案がなされ、「学生に限界なんてない!ぐらいいに考えてほしい」と激励の言葉をいただきました。

私は労福会に関わってまだ日が浅いので、支援活動についてはまだよくわからないことがたくさんありました。それでもシンポジウムを通し

て、ホームレス支援活動の奥の深さ、難しさを、学生新聞で取材したとき以上に感じることができました。特に奥田さんのお話からは、これまで関わってきたホームレスの方々への深い思いが感じられました。日本の反対側で、こんなに素晴らしい活動をしている人達がいると思うと、北海道での活動にもさらに意欲が湧きました。今後も支援活動について学ばせていただきたいと思います



## 北星学園大学での学習会について

松浦 聡美(北星学園大学 社会福祉学部2年)

私が今年度楽しみにしていた活動の一つに、「北星学習会」があります。北大生や社会人の方々にとっては全く馴染みがない活動かと思いますが、実は北星大に通う労福メンバーで集まって、毎週お昼休みに勉強したり議論したりしました。

この北星学習会は昨年度に始まったばかりなので、まだ何から何まで手探り状態です。とりあえず今年度の後期は、週ごとに担当するメンバーを割り振って、自分が担当する週は自分の議論したいテーマを提示する、という方式で行いました。そのため、議論テーマは多岐に渡りました。「格差社会」を取り扱う週もあれば、「なぜボランティアをするのか」ということを話し合った週もありました。

私は自己責任論に関するみんなの意見が聞きたいと思っていたので、自分が担当する週で取り扱うことにしました。自己責任論とは、『現在の望ましくない結果をもたらした責任は、本人自身にある』という主張(湯浅誠『反貧困』)のことです。私が担当した学習会の前半は、自己責任論の説明、具体例(ホームレスになったのはリストラ等の災難を事前に予期して貯金しておかなかった本人が悪い、等)とその反論(そもそも貯金できるほどの給料を得ていなかったケースがある、等)を載せた配布資料に、みんなで目を通しました。そして後半は、議論テーマに沿って議論しました。議論テーマは、『まだ遊んでいたい』等の理由で自らフリーターになった人が、仕事先の解雇や親戚からの縁切りで10年後ホームレスになったとしたら、その人にはどの程度責任があるのだろう

か』というものです。

学習会の参加者全員がそれぞれ違った考えを持っていて、その意見を率直に言ってくれたので、議論は大いに盛り上がりました。たとえば、『まだ遊んでいたい』という理由でフリーターを10年も続けるなんて甘い考え。貧困に陥ったのは自業自得』という意見が出る一方で、「子どもが成人したからと言って親の責任はなくなるものではない。しっかり自立するように子どもを促さなかった親の責任は重い」といった意見が出たりしました。

北星学習会はすぐ脱路上(脱路上生活)の手助けになる、というわけではないけれど、労福の活動を続ける上でこうした話し合いの場は貴重だと感じました。みんなそれぞれ悩みや疑問を持っているはずだし、それを表に出さないまま活動を続けていくのは、わだかまりを残すことになるのではないのでしょうか。飲み会でそういった話をするのもいいけれど、一人一人の意見を丁寧に聞いていく機会もあっていいのではないかなと思いました。

労福の活動と言ったら、夜回り、炊き出し、人数調査、生活保護同伴、等が挙げられるでしょうか。それらの活動を行っていく上で、みんなで集まって話し合う必要性をメンバー数人が感じたこと、それによって「北星学習会」という小さな活動が派生したことは、個人的にはけっこう意味のあることだと思います。多くの課題を残している北星学習会ですが、これからも途切れないように細々と続けていきたいです。

## 労福会に関わり始めて

勝又茜（北海道大学文学部 2年生）

去年の5月、知り合いに誘われてふらふらと労福会の夜回りに参加し、よくわからないままなんとなく会員になりました。「よくわからないままなんとなく」といっても、もちろん、札幌で野宿している方と初めて面と向かってお話する中で、感じることを考えること衝撃を受けることが多々あり、もっと話したい・状況を知りたいと思ったり、一回限りの参加では支援する側・される側双方にとっても何にもならないのではないか、とぼんやりと考えたりしたからです。

その後、夜回りだけではなく炊き出しや人数調査にも参加し、夜回りで自分が普段まわるコースにいる野宿者の方に顔を覚えてもらうようにもなりました。最初は、支援活動という意識が強く(もちろん今でもそういう意識を持っていますが)、野宿者の方々とのお話ではとにかく自立につながる話を中心にした方がいいのかなあと考えていたため、(また、生活保護制度等について知識不足だったこともあり…)夜回りのときはなんとなく緊張感がありました。だから、会話もよそよそしくなりがちでした。ですが、最近ではまずは信頼関係を築くことが大切なんじゃないかなあと考えるようにもな

り、夜回りの際良い意味での気楽さのようなものを持つことができています。といっても、今でも会話がスムーズにできるわけではありませんが、それは今後も活動の経験を積み重ねていくことで克服できたらなあ、と思っています。

まだまだ自分の中では勉強不足な事柄が多く、会員としてこれといって役には立てていません。労福会の活動で強く感じたことは、社会人の会員も学生の会員も、こういうボランティア活動について、のみならずもっと大きな範囲での「労働」や「福祉」といったものに関連する事柄について、よく考えたり勉強したりしているなあ、ということです。わたしも、もっともっと考えたり勉強したりしていきたいし、その考えたり勉強したりしたことを活動に生かしていきたいです。

少し話はそれますが、労福会のことを知らない人に呼びかけるための周知活動(ビラ貼りなど?)も、今後は積極的に手伝っていきたいと思います。

以上、活動を通しての感想というより今後の抱負のような感じになってしまいましたが、とにかく来年度はもっと役に立てるように頑張りたいです。

## 炊き出しについて考えること

北星学園大学社会福祉学部2年 但木 水紀

「ホームレスに接する前と接した後ではイメージが随分と変わったでしょう?」

これは、私が先日の炊き出しでボランティア側の初参加者に投げかけた言葉です。この問いかけに対し、初参加者は揃って肯定の意を示してくれました。私自身も、炊き出しに来てじっくりと来場者と会話をするまで、勝手な空想によるイメージと偏見が先走り、ホームレスは遠い存在であり、別次元の住人のようなものだと考えていたからです。夜回りに初めて参加した時はホームレスの現状を探ることで精一杯でしたが、炊き出しでホームレスの方々とじっくり話をし、あちらの話だけではなく私が考えていることや些細な悩み事まで聞いてくれて、思い描いていたものを打ち砕かれました。ホームレスは別次元の住人ではなく、毎日を必死に生きて地に足を付けている、私達と何ら変わらない人間なのだという事実です。そういったことを教えてくれたホームレスの方々のためにも、まだまだ未熟者ですが、少しでも活動の役に立てればと思います。

さて、今年度の炊き出しについてです。今年度の炊き出しは札幌市や司法書士会などと共催で計6回、行われました。食事を提供し物資を配布するだけでなく、普段、路上

で生活していて気にすることはあってもどうしようもできない健康状態を測る「健康診断」、司法書士など専門家の方に相談する機会を設けた「各種相談会」、ビンゴ大会やクイズ大会を行うなど、充実感のある炊き出しになっていたと思います。

炊き出しは、先にも少し触れましたが、限られた時間内で行う夜回りとは違い、じっくり時間をかけて話をすることのできる貴重な場というのが利点の一つです。顔見知りの来場者には、世間話だけではなく、更に深い話を切り出し、次のステップへ導くことが出来れば幸いです。例えば、会話の対象が路上生活者であれば脱路上に繋がる具体的な話、生活保護受給者であれば日々の生活の悩み事や来場理由など、一歩踏み込んだ話をしてみる。それが出来るようになれば、会の活動が活発化するでしょう。しかし、深い話を持ちかける、相談を受ける、援助を求められるにはある程度の信頼関係や事の緊急性がなければならないのが現実です。信頼関係を築き、緊急時に対応できるだけの経験と知識を有するためにも、活動には継続して参加することが大事です。自らの活動の根源を見失わず、今後も継続して活動に参加し、社会の役に立てればと思います。



# オオタキマサンの「もう読書するしかない!」

第2回 「ルポ雇用劣化不況」竹信三恵子著(岩波書店 2009年)



日本の製造業などでよくいわれる「国際的な競争に勝ち抜くため」といった言葉の裏で、人間が生活していくのに不十分な労働環境が常態化している

現状を、多くのインタビューなどを通して明るみに出している。

著者は、様々な労働の現場をたずね、彼(彼女)らの話を聞く中で、現在の労働者を人間とも思わないような労働の仕組み自体が、日本の不況をより深刻なものにしているのではないかと考えるようになる。

本来、労働者というのはサービス業であれば、顧客と直に接するために、顧客がどのようなことを望んでいるかをもっともよく把握している。ま

た、製造業などの現場でも、どのような方法で仕事をすればやりやすいか(効率的か)ということを常に考えている。そして、そうした情報というのは本来企業などの組織にとって、業務内容を効率化したり、よりよい製品やサービスを提供するために不可欠なものはずある。

しかし、現在の派遣労働者などの非正規労働者は、自分達のそうした「気づき」を上司などに報告するようなことを、そもそも期待されていない。彼(彼女)らに求められるのは、ただ与えられた仕事を黙々とこなすことであり、創意工夫や上司への提言をしても、それらは一切評価の対象とならないばかりか、「余計な文句」のように見なされてしまうことが少なくない。

結果、業務の効率化や製品やサービスの向上に繋がる情報は上に伝わらず、売り上げを伸ばすこと自体の障害となってしまうという。本書にはそうした雇用の現場

の悪化に伴って、生産やサービスの質が低下している実例が多く載せられている。

僕自身も、かつてアルバイトなどをしていたときに、「マジメに働こうが給料変わらないんだったら手抜きしたほうがマシだ」などと思ったこともあるし、自分達が現場で気付いたことを上司に伝えて煙たがられたこともある。

感情論ではないけれども、働き手であっても人間なのだから、道具のように使ってい社会はよくならん。そういう意味では、著者の主張には非常に納得できるものがあった。

それにしても、やっぱり「こういう問題」(というくりで分かっていただけかどうかはわからないけれど)について知る際には、岩波の本というのは役に立つなあと思う。でも、前回も岩波新書(『ルポ貧困大国アメリカ』)だったし、もし次回があったら今度は別のところの本にしようとは思う。

## 今年度のおおまかな活動記録

5月10日  
5月30日  
6月14日  
6月27日  
8月29日  
9月12日  
9月15日  
9月26日、27日  
10月3日  
10月17日  
10月31日  
11月14日  
11月28日  
1月30日  
2月20日

通年

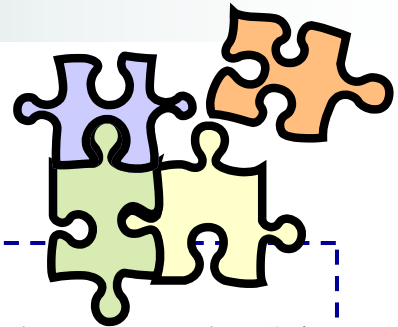
札幌市との意見交換会  
炊き出し・総合相談会①(札幌市、ハンドインハンドとの共催)  
臨時総会  
炊き出し・総合相談会②(札幌市との共催)  
学習会  
夏季人数調査  
札幌市との意見交換会  
寄せ場交流会  
炊き出し・総合相談会③(札幌市との共催)  
寄せ場交流会参加報告会  
炊き出し・総合相談会④(札幌市、ハンドインハンドとの共催)  
ケースカンファレンス  
設立10周年記念企画  
冬季人数調査  
炊き出し・法律相談会(司法書士会との共催)

第1・第3土曜日に夜回り

## 会員の皆様へ お知らせとお願い

### ○ 総会のお知らせ

今年度も、一年間の総括として総会を行います。詳細については別途お送りいたしました用紙をご覧くださいと思いますが、日時は3月13日(土) 17時半開始、場所はかでの2・7(札幌市中央区北2条西7)940研修室です。今年は、総会を単なる「報告の場所」としてだけではなく、意見交換の場として機能させることを目指し、資料を例年より早く作成いたしました。総会に参加いただける方は、ぜひ資料に事前に目を通してから、お越しいただければと思います。ぜひみなさまふるってご参加ください。



### 編集後記

どうも、今回も会報作成を担当したオオタキです。前回、春(4月 か5月)に作成した時は、「会報が年に一回しか届かないなんて問題です!」とか意気込んだことを書いていましたが、蓋を開けてみたら結局、年4回も出せずに終わってしまいました。本当は冬に出す予定だったこの号も、3月になって「3月って寒いけど冬なんだろうか?」などと思って「冬(?)号」としました。ふざけてるわけではなく、正直なところなのです。ただ、会報が滞ってしまったことについては、会員のみなさんに申し訳ありません(汗)。この場を借りてお詫びします。それにしても、広報と言うのは、意外と手間がかかって、そして編集も時間のかかるものなんだなあというのを非常に実感した一年間でした。労福会の今後がどうなるのか、全くよく分かりませんが、今後ともよろしく願いいたします。(2010年3月7日)

### <発行元>

北海道の労働と福祉を考える会  
〒004-0861  
札幌市厚別区大谷地西2-3-1  
北星学園大学内 木下武徳研究室  
編集責任者: 大滝雅史  
ホームページ:  
<http://roufuku.org/>  
ブログ[sapporo路上通信]:  
<http://roufuku6029.blog95.fc2.com/>

### <連絡先>

電話 090-7515-8393 (中村)  
E-mail [info@roufuku.org](mailto:info@roufuku.org)  
木下(代表)に御用の方は、北星学園大学の  
代表番号から木下武徳研究室に繋ぐか、  
[kinoshita@hokusei.ac.jp](mailto:kinoshita@hokusei.ac.jp)までお願いします。